

# 否定述語と呼応する 「しか」「以外」「ほか」をめぐって

朴 江 訓

## 1. はじめに

現代日本語における「しか…ない（以下、「しか」と呼ぶ）」「以外…ない（以下、「以外」と呼ぶ）」「ほか…ない（以下、「ほか」と呼ぶ）」は、以下のような構文において必ず否定述語と共起しなければならない（以下、これらの表現の部分に下線を引く）。

- (1) a. 太郎しか来なかった（\*来た）。  
b. 進学をあきらめるしかなかった（\*あった）。
- (2) a. 太郎以外（誰も）来なかった（\*来た）。  
b. 進学をあきらめる以外なかった（\*あった）。
- (3) a. 太郎のほか（誰も）来なかった（\*来た）。  
b. 進学をあきらめる（より）ほかなかった（\*あった）。（茂木（2005:15-16））

このような「しか」「以外」「ほか」は必ず否定辞と共起しなければならないという否定極性項目（Negative Polarity Item）の特徴を持つといえる<sup>1</sup>。山口（1991）、宮地（2003）はこの3項目、「しか」「以外」「ほか」を「[其他否定<sup>2</sup>]の表現」と、江口（2000）、茂木（2005）は「[除外]の表現」と呼び（本稿では便宜上、山口（1991）にしたがい、「其他否定」の表現と呼ぶことにする）、これらはほぼ同様な意味的・統語的特徴を持っていると指摘している<sup>3</sup>。

これに対し本稿は、「しか」「以外」「ほか」を同列に扱えない統語的相違点が存在することを指摘する。これまでの先行研究では、これらの表現の意味論的類似点を中心に注目され、その統語的相違点についてはほとんど述べられてこなかった。本稿はこれらの表現が統語的にどのように使い分けられているかを検討し、このような相違点が生じる理由について統語的アプローチで分析することを目的とする。

## 2. 先行研究の概観

本節では、「其他否定」の表現の類似点に注目した先行研究を概観する。まず、「其他

否定」の表現の意味的類似点を概観した上で、構文的類似点のみをみる。

## 2.1. 「其他否定」の表現の類似点

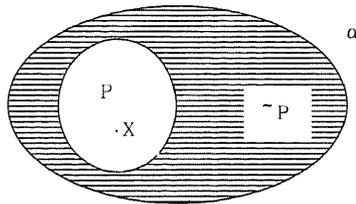
### 2.1.1 意味的類似点

茂木 (2005: 15-16) は前述の「其他否定」の表現がそれぞれ用いられた (1a) (2a) (3a) について、以下のように述べている。

(1a) (2a) (3a) では、「話し手が想定する人の中で「太郎」だけは「来た」ものの、「太郎」を除く残りの人は「来なかった」という解釈がなされる。問題となっている要素 (人) の集合を  $\alpha$ 、「しか」「以外」「ほか」が後接している要素 (「太郎」) を X、命題 (「来る」) を P とすると、(1a) (2a) (3a) の「しか」「以外」「ほか」は「集合  $\alpha$  において、要素 X を除き命題 P が成立する要素はない (集合  $\alpha$  において P を成立させる唯一の要素である)」ということを表しているといえる。このとき、(1a) (2a) (3a) は、表面上、「X しか / 以外 / ほかの P ない」の形をとるものの、意味的には、X は P に関して肯定され、X を除いた集合  $\alpha$  の残りの要素が P に関して否定される。

茂木 (2002) は上記の意味的特徴を下記のような (図 1) で示している。

(図 1) 集合  $\alpha$  において、要素 X を除き命題 P が成立する要素はない。  
(= 集合  $\alpha$  において、X は P を成立させる唯一の要素である。)



山口 (1991)、江口 (2000)、宮地 (2003) などにおいて上記の茂木のような具体的な説明は行われていないが、類似した指摘がなされている。

また、片岡 (2006) は「其他否定」の表現の意味的共通性を以下のように示している。

(4) 太郎しか / 以外 / のほか来なかった。

(5) 前提：太郎が来た。

断定：太郎以外の人は来なかった。

NOT  $\exists x (x \neq \text{太郎}) (x \text{ が来た})$  (=  $\forall x (x \neq \text{太郎}) \text{ NOT } (x \text{ が来た})$ )

(片岡 (2006: 141, (93) を一部改変<sup>4)</sup>)

以上、「其他否定」の表現の意味的類似性を概観した。次節では、その構文的類似点についてみる。

### 2.1.2 構文的類似点

江口 (2000) と茂木 (2005) は「其他否定」の表現の以下のような構文的類似点を挙げている。まず、否定述語との共起に関する類似点である。

- (6) a. 太郎は焼酎しか飲み物を飲まなかった (\*飲んだ)。
- b. 太郎は焼酎以外飲み物を飲まなかった (\*飲んだ)。
- c. 太郎は焼酎のほか飲み物を飲まなかった (\*飲んだ)。(江口(2002: 292-294))

「其他否定」の表現は上記の (6) のような構文において必ず否定述語と共起しなければならない。次はホスト<sup>5</sup>との関係に関する類似点を見る (二重斜線はホストを指すとする)。

- (7) a. 太郎は焼酎しか飲み物を飲まなかった。
- a'. 太郎は焼酎しか飲まなかった。
- b. 太郎は焼酎以外飲み物を飲まなかった。
- b'. 太郎は焼酎以外飲まなかった。
- c. 太郎は焼酎のほか飲み物を飲まなかった。
- c'. 太郎は焼酎のほか飲まなかった。 (同: 292-295)

まず、(7a')(7b')(7c') で示されるように、ホストは明示されなくてもよいことが分かる。次に、以下の (8a')(8b')(8c') のように「其他否定」の表現はホストの後に位置できる。

- (8) a. 太郎は焼酎しか飲み物を飲まなかった。
- a'. 太郎は飲み物を焼酎しか飲まなかった。
- b. 太郎は焼酎以外飲み物を飲まなかった。
- b'. 太郎は飲み物を焼酎以外飲まなかった。
- c. 太郎は焼酎のほか飲み物を飲まなかった。
- c'. 太郎は飲み物を焼酎のほか飲まなかった。 (同: 294-295)

最後にホストは普通名詞のみであり、固有名詞が来ると非文になるとされている。

- (9) a. 太郎は次郎しか学生を呼ばなかった。
- a'. \* 太郎は次郎しか三郎を呼ばなかった。

- b. 太郎は次郎以外学生を呼ばなかった。  
 b'. \* 太郎は次郎以外三郎を呼ばなかった。  
 c. 太郎は次郎のほか学生を呼ばなかった。  
 c'. \* 太郎は次郎のほか三郎を呼ばなかった。 (同: 294 を一部改変<sup>7)</sup>)

以上の先行研究の「其他否定」の表現「しか」「以外」「ほか」の共通性を表すと下記の(表1)のようになる(江口(2000: 294))。

(表1) 「其他否定」の表現の構文的類似点

述語の極性	否定のみ
ホストの存在	不要
語順制限	なし
ホストの種類	普通名詞のみ

加えて、宮地(2003)では前述の(1)–(3)において確認したように、「しか」「以外」「ほか」は、名詞句及び文へ後接できるという類似点もみられるとされている。

以上、先行研究では、「其他否定」の表現、「しか」「以外」「ほか」を意味的及び構文的類似点に基づき、ほぼ同列に扱っていることが分かった。次節では、先行研究の指摘と異なり、これらの表現がある構文的環境の下では違う振る舞いを示すことを述べ、これらの表現を同様に扱うには無理があることを指摘する。

### 3. 問題の所在

前節では先行研究において、「其他否定」の表現は(図1)と(表1)の事実からほとんど同様の表現として扱われてきたことを概観した。しかしながら、以下のようなデータは「しか」「以外」「ほか」の生起環境がまったく同様ではないことを示唆するものである。

〈単一否定文内で他の否定極性項目との共起の場合〉

- (10) a. \*自分しか誰も信用できない孤独な人<sup>8</sup>。  
 b. 自分以外誰も信用できない孤独な人。 (朝日新聞 2002/12/2)  
 c. 自分のほか誰も信用できない孤独な人。  
 (11) a. \*寝室にはベッドしか何も置かない。  
 b. 寝室にはベッド以外何も置かない。 (朝日新聞 2002/1/18)  
 c. 寝室にはベッドのほか何も置かない。  
 (12) a. \*返還には絶対反対。この島しかどこにも行くところがない。

- b. 返還には絶対反対。この島以外どこにも行くところがない。

(朝日新聞 2006/6/6)

- c. 返還には絶対反対。この島のほかどこにも行くところがない。

(10)–(12) は「しか」「以外」「ほか」が単一否定文内で他の否定極性項目「不定語モ」と同じ項位置で共起した構文、つまり多重否定極性項目構文 (Multiple NPI construction) であるが、「しか」は (10a)–(12a) のように不適格になるのに対し、「以外」「ほか」は適格になる。実際に「しか」に関しては、これまでの多くの先行研究において、「しか」が用いられた多重否定極性項目構文は許容されることがすでに指摘されている (Kato (1985)、Aoyagi and Ishii (1994) その他)<sup>9</sup>。すなわち、「しか」は同一節内において否定辞と一対一の対応関係を持たなければならないとされる。さらに次のデータで確認する。

- (13) a. \*誰も「アスペクト」しか読まなかった。 (Kato (1985 : 154, (45))

- b. (?) 誰も「アスペクト」以外読まなかった。

- c. 誰も「アスペクト」のほか読まなかった。

- (14) a. \*太郎しか決してしゃべらなかった。 (同、(52))

- b. 太郎以外決してしゃべらなかった。

- c. (?) 太郎のほか決してしゃべらなかった。

(13) は「其他否定」の表現と「誰も」がそれぞれ異なる項位置、つまり主語位置と目的語位置で生じた構文であり、(14) において、「其他否定」の表現が、「決して」と共起している文である。この2例に共通する事実は「しか」と異なって、「以外」「ほか」は容認度がかなり高いということである。

次は反語表現 (adversative predicate) の構文において、「其他否定」の表現の振る舞いが異なることをみる。

#### 〈反語表現の場合〉

- (15) a. \*これは彼しか誰が支援するのか？

- b. これは彼以外誰が支援するのか？

(朝日新聞 2005/6/8)

- c. これは彼のほか誰が支援するのか？

- (16) a. \*太郎ができる仕事ってこれしか何があるのか？

- b. 太郎ができる仕事ってこれ以外何があるのか？

- c. 太郎ができる仕事ってこのほか何があるのか？

- (17) a. \*それをまつのを禁じている国が日本しかどこにあるのか？

- b. それをまつのを禁じている国が日本以外どこにあるのか？

(朝日新聞 2001/4/19)

c. それをまつのを禁じている国が日本のほかどこにあるのか？

(15)–(17) の文中には否定辞が現れないが、否定の含意 (implicature) によって「以外」「ほか」が適格になる。これは、「以外」「ほか」が反語表現において用いられることが可能であることを示している。一方、(15a)–(17a) のように「しか」が用いられた文は明らかに不適格文になる。

最後に、「しか」「以外」「ほか」が数量詞と共起する際、違う振る舞いを示すことを例示したい。

〈数量詞への後接の可否〉

- (18) a. 大学の駐車場では車が1台しかない。  
 b. \*大学の駐車場では車が1台以外ない。  
 c. \*大学の駐車場では車が1台のほかない。
- (19) a. 韓国のソウルで日本のすし屋は一箇所しかない。  
 b. \*韓国のソウルで日本のすし屋は一箇所以外ない。  
 c. \*韓国のソウルで日本のすし屋は一箇所のほかない。
- (20) a. (10人が来ると思っていたのに) 3人しか来なかった。  
 b. \*(10人が来ると思っていたのに) 3人以外来なかった。  
 c. \*(10人が来ると思っていたのに) 3人のほか来なかった。
- (21) a. 太郎は本代として100円しか払わなかった。  
 b. \*太郎は本代として100円以外払わなかった。  
 c. \*太郎は本代として100円のほか払わなかった。

(18)(19)において、「しか」「以外」「ほか」が「1+助数詞」に、(20)(21)においては普通の助数詞に後接する構文であるが、「しか」と異なり、「以外」「ほか」は許されない。

以上、「其他否定」の表現「しか」と「以外」「ほか」は先行研究の指摘と異なって<sup>10</sup>、3つの異なる統語的な振る舞いをみせることを述べた。これをまとめると次の(表2)のようになる。

(表2) 「しか」と「以外」「ほか」の統語的相違点 (√: 生起可能 \* : 生起不可能)

特 徴	其他否定	「しか」	「以外 / ほか」
① 単一否定文内で他の NPI との共起		*	√
② 反語表現の構文における生起		*	√
③ 数量詞への後接		√	*

次節では「しか」と「以外」「ほか」(以下、「以外 / ほか」とする)において、なぜ

(表2)のような統語的相違点が生じるのかについて分析を行う。

#### 4. 「しか」と「以外/ほか」の認可条件

本節では、「しか」と「以外/ほか」において前節の(表2)のような統語的相違点が以下のような認可条件の相違点に起因すると主張する。

##### (22) 本稿の主張

「しか」と「以外/ほか」の違いは、「しか」と「以外/ほか」の認可条件が異なるためである。すなわち、「しか」は否定辞から直接認可されるのに対し、「以外/ほか」は否定辞から直接認可されるのではなく、「以外/ほか」と同じ構成素をなしている「不定語モ」が(顕在的または非顕在的に)現れ、否定辞に認可される。

次節では、上記の主張(22)を検証する。

##### 4.1. 多重否定極性項目構文の場合

本節では、本稿の主張(22)を裏付ける証拠を提示する。まず、単一否定文内で他のNPIと共起する多重否定極性項目構文からみしてみる。前述の(13)–(14)において「以外/ほか」は「しか」と異なって単一否定文内で他のNPIと共起することが可能であると述べた。その例文を以下に再掲する。

- (23) a. \*誰も「アスペクト」しか読まなかった。  
b. (?)誰も「アスペクト」以外読まなかった。  
c. 誰も「アスペクト」のほか読まなかった。 (= (13))
- (24) a. \*太郎しか決してしゃべらなかった。  
b. 太郎以外決してしゃべらなかった。  
c. (?)太郎のほか決してしゃべらなかった。 (= (14))

ここで、「しか」「以外」「ほか」の右側に「不定語モ」を顕在化して入れてみる。波線の部分は、顕在化された「不定語モ」である。

- (25) a. \*誰も「アスペクト」しか何も読まなかった。  
b. (?)誰も「アスペクト」以外何も読まなかった。  
c. 誰も「アスペクト」のほか何も読まなかった。
- (26) a. \*太郎しか誰も決してしゃべらなかった。  
b. 太郎以外誰も決してしゃべらなかった。

c. (?) 太郎のほか誰も決してしゃべらなかつた。

(25b)(25c) の場合、単一否定辞の下で、3つの否定極性項目「誰も」「以外/ほか」「何も」が、(26b)(26c) においては「以外/ほか」「誰も」「決して」が現れているが、適格文になる。これに対し、「しか」は(25a)(26a)のように不適格文になる。本稿は上記の(25)(26)と(23)(24)の許容度に注目したい。つまり、(23)(24)のように「不定語モ」を顕在化しない場合であっても、(25)(26)のように「不定語モ」を顕在化する場合であってもその適格性はほとんど変わらない。これは「以外/ほか」の右側に「不定語モ」が非顕在的に現れていることを示唆する証拠であると考えられる。

また、本稿では「以外/ほか」と「不定語モ」は同じ構成素をなしていると考えられる。これは両者の語順制限の現象から説明できる。

- (27) a. \*誰も何も「アスペクト」以外読まなかつた。  
b. \*誰も何も「アスペクト」のほか読まなかつた。  
(28) a. \*誰も太郎以外決してしゃべらなかつた。  
b. \*誰も太郎のほか決してしゃべらなかつた。

(27a)(28b) は上記の(25b)(26b)の「以外-不定語モ」の語順を「不定語モ-以外」のように変えた文であり、(27b)(28b)は(25c)(26c)の「ほか-不定語モ」の語順を「不定語モ-ほか」のように変えた文であるが、いずれも不適格になる。これは「以外」「ほか」と「不定語モ」が一つのまとまりをなしていることを示唆する証拠であると考えられる<sup>11</sup>。

それではなぜ「以外/ほか」は単一の否定辞の下で他の多数の否定極性項目と共に起るのであろうか。Watanabe (2004)、渡辺 (2005) は「不定語モ」についてこれまでの先行研究における否定極性項目としての分析と異なり、当該要素を否定一致項目 (Negative Concord Item) として分析を行い、「不定語モ」は単一の否定辞の下で複数生起可能であると述べている。ここで、否定一致項目とは Haegeman & Zanuttini (1991) (1996) 以来、盛んに研究が行われている現象で、否定の意味を担う表現 ([+Neg]) が文中に複数存在するにもかかわらず、二重否定にはならず単一の否定しか意味しない現象をさす (詳細は Watanabe (2004)、渡辺 (2005) を参照)。このような Watanabe、渡辺の説明に基づき、「以外/ほか」が「しか」と異なり、多重否定極性項目構文が許される理由は、「以外/ほか」の右側に「不定語モ」が顕在的または非顕在的に現れ、その「不定語モ」がもう一つの「不定語モ」と共起しているため適格な文になると考えられる。

上記のようなメカニズムに基づき、(25b) において「「アスペクト」以外」の右側の波線部「何も」が否定辞と一致を行う場合に関しては以下のように説明する。主語位置に「誰も」があるが、「誰も」「何も」とも同じ否定一致項目であるため適格文になるの

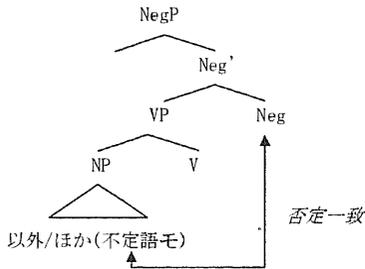
である。また、(26b) においては、「太郎以外」の右側の波線部「誰も」が否定辞と一致を行う。さらに朴 (2007b) における「決して」も否定一致項目として扱うべきであるという主張に基づけば、「誰も」「決して」の共起には問題がなく適格文になるのである。そしてこの分析は (25c)－(26c) の「ほか」にも同様に適用できると考えられる。

これに対し、「しか」は「不定語モ」との関連性をまったく持たないため、否定辞と一対一関係を持たなければならない。つまり、朴 (2007a) で指摘されたように、項位置の「しか」は否定一致項目ではなく、否定極性項目であるため「不定語モ」または「決して」と単一否定文内で共起できないのである。

また、「名詞句＋以外／ほか」の右側に非顕在的に現れている「不定語モ」の種類は、その名詞句によって決められると考える。例えば、その名詞句が人間であると「誰も」が、物であると「何も」が、場所である「どこにも」が現れる。

大まかではあるが、以上の「以外／ほか」の認可条件を樹形図で示すと以下の (図 2) のようになるだろう。

(図 2) 「以外／ほか」が主語位置に現れる時



しかしながら、前節で確認したように、「以外／ほか」の右側には以下のように「不定語モ」が顕在的に (overtly) 現れ、否定辞と一致を行っているパターンもある。

- (29) a. 自分**以外**誰も信用できない孤独な人。 (= (10b))  
 b. 自分の**ほか**誰も信用できない孤独な人。 (= (10c))
- (30) a. 寝室にはベッド**以外**何も置かない。 (= (11b))  
 b. 寝室にはベッドの**ほか**何も置かない。 (= (11c))
- (31) a. 返還には絶対反対。この島**以外**どこにも行くところがない。 (= (12b))  
 b. 返還には絶対反対。この島の**ほか**どこにも行くところがない。 (= (12c))

現時点ではどのようなメカニズムで (29)－(31) のように「不定語モ」が顕在的に現れ、(23)(24) のように非顕在的に現れているかに関する分析は不可能である。ただし、予測可能な説明としては、(29)－(31) のと (23)(24) の違いは「以外／ほか」と他の否

定一致項目「不定語モ」または「決して」との共起における統語的位置から探れるのではないかと考えている。つまり、上記の (29)–(31) は「以外/ほか」「不定語モ」と同じ項位置、例えば (29) は目的語位置に、(30) は目的語位置に、(31) は場所格 (Locative) に現れているのに対し、(23) (24) は同じ項位置で生起していないのである。これに関するさらなる研究は今後の課題としたい。

しかし、上記の (図 2) のような認可条件を仮定すると「以外/ほか」が「しか」と異なり、なぜ他の否定一致項目と共起できるのかがうまく説明できる<sup>12</sup>。また以下にみる 4.2 節と 4.3 節における 2 つの現象も説明できる利点がある。

## 4.2. 反語表現の場合

3 節において「以外/ほか」は「しか」と異なり、反語表現に用いられることをみた。英語の否定極性項目をみてみると、これらは反語表現の構文において以下のように生起可能であるとされる (下線部は否定極性項目である)。

- (32) I was surprised that she contributed a red cent. (Linebarger (1981 : 67))  
「訳<sup>13</sup>：私は (彼女がびた一文も寄付しないと思っていたのに) 彼女が寄付金を出したことに驚いている。」

下線部の「a red cent (びた一文も)」は否定極性項目であるにもかかわらず、否定辞と共起しなくても適格文になる。これは (32) が前述の (15)–(17) のような反語表現の類に属するからである<sup>14</sup>。(32) における否定極性項目の認可条件について、Linebarger は以下のように 2 つの条件を提示している。

- (33) a. 条件 i : LF 表示において否定極性項目が否定辞の「直接の作用域 (immediate scope)<sup>15</sup>」内にある。  
b. 条件 ii : 否定極性項目を含む文の含意 (implicature) が得られて、その含意される文の意味表示が条件 i を満足するような形式を備えている。

(32) のような文は、その「that」補文に述べられていることと反対のことが期待されていることが含意される。よって、(32) は以下の (34) のような文を含意として持つ。

- (34) I had expected her not to contribute a red cent.  
「訳：私は彼女がびた一文も寄付しないことを予測していた。」

(34) の下線部に注目すると、この部分は「a red cent」という否定極性項目が否定辞「not」の直接の作用域内にある形をしている。こうして、(34) は条件 ii により適格文

となると説明される。こういう説明は同じ反語表現である「以外 / ほか」にも適用できると考えられる。(15a)–(17a) の「しか」と異なり、(15)–(17) の「以外 / ほか」が適格文になる理由は、「以外 / ほか」が英語の場合と同様に LF においてそれぞれ以下のような構造を持つからであると考えられる。

- (35) a. これを支援する人は彼以外誰がいるのか？ (=15b)  
 → LF: これを支援する人は彼以外誰もない。  
 b. これを支援する人は彼のほか誰がいるのか？ (=15c)  
 → LF: これを支援する人は彼のほか誰もない。
- (36) a. 太郎ができる仕事ってこれ以外何があるのか？ (=16b)  
 → LF: 太郎ができる仕事ってこれ以外何もない。  
 b. 太郎ができる仕事ってこのほか何があるのか？ (=16c)  
 → LF: 太郎ができる仕事ってこのほか何もない。
- (37) a. それをまつのを禁じている国が日本以外どこにあるのか？ (=17b)  
 → LF: それをまつのを禁じている国が日本以外どこにもない。  
 b. それをまつのを禁じている国が日本のほかどこにあるのか？ (=17c)  
 → LF: それをまつのを禁じている国が日本のほかどこにもない。

これに対し、「しか」は「不定語モ」との相関性を持たないため、(15a)–(17a) のように反語表現の構文において用いられない。

以上、「以外 / ほか」が反語表現に用いられる理由について、「不定語モ」との相関性に起因すると述べた。

#### 4.3. 数量詞への後接の場合

本節では、数量詞への後接における場合をみでみる。前述の (18)–(21) において、「以外 / ほか」は数量詞に後接できないことを述べた。以下にそのデータを再掲する。

- (38) a. \*大学の駐車場では車が1台以外 / のほかない。  
 b. \*韓国のソウルで日本のすし屋は一箇所以外 / のほかない。  
 c. \*(10人が来ると思っていたのに) 3人以外 / のほか来なかった。  
 d. \*太郎は本代として100円以外 / のほか払わなかった。

しかしながら、「以外」「ほか」はすべての数量詞に後接できないわけではない。以下の例文を参照されたい。

- (39) a. 大学の駐車場では車がその1台以外 / のほかない。  
 b. 韓国のソウルで日本のすし屋はその一箇所以外 / のほかない。

- c. (10 人が来ると思っていたのに) その 3 人以外 / のほか来なかった。
- d. 太郎は本代としてその 100 円以外 / のほか払わなかった。

(39) における「以外 / ほか」は (38) の場合と異なり、適格文になる。(39) と (38) の相違点は、「以外 / ほか」に前接している数量詞の読みが不特定 (indefinite) の読みか、特定 (definite) の読みかである。つまり、数量詞の読みが不特定の読みの場合は、「以外 / ほか」が用いられないのに対し、特定の読みの場合は、用いられるのである。それではなぜ「以外 / ほか」は「しか」と異なって特定の読みの場合にしか生起できないのであろうか。これに対する答えも「以外 / ほか」の「不定語モ」との相関関係から導かれると考えられる。つまり、上記の (38) のような不特定の読みの場合は、以下の (40) のように波線部の「不定語モ」の生起が想定できないのである。

- (40) a. \*大学の駐車場では車が 1 台以外 / のほか何もない。
- b. \*韓国のソウルで日本のすし屋は一箇所以外 / のほかどこにもない。
- c. \*(10 人が来ると思っていたのに) 3 人以外 / のほか誰も来なかった。
- d. \*太郎は本代として 100 円以外 / のほか何も払わなかった。

これに対し、特定 (definite) の読みの場合であると、以下の (41) のように「不定語モ」の想定が可能になる。

- (41) a. 大学の駐車場では車がその 1 台以外 / のほか何もない。
- b. 韓国のソウルで日本のすし屋はその一箇所以外 / のほかどこにもない。
- c. (10 人が来ると思っていたのに) その 3 人以外 / のほか誰も来なかった。
- d. 太郎は本代としてその 100 円以外 / のほか何も払わなかった。

以上、本稿は「しか」と「以外 / ほか」において、3 節の (表 2) のように非対称性が生じる理由は、その認可条件が異なっているからであると述べた。つまり、「しか」と異なり、「以外 / ほか」はその右側に現れている「不定語モ」が否定辞に認可されると仮定すれば、前述の非対称性がうまく説明できると主張した。

## 5. おわりに

本稿では、「其他否定」の表現「しか」「以外」「ほか」がどのように使い分けられているかを述べ、その非対称性が生じる理由について統語的アプローチで分析を行った。先行研究では「其他否定」の表現は意味的・統語的にほとんど同様であると指摘されてきた。しかし、本稿では、「しか」と「以外」「ほか」において、いくつかの統語的環境で生起できる場合と生起できない場合において違いがあることを述べた。つまり、多重

否定極性項目の構文及び反語表現の構文において「しか」は生起できないのに対し、「以外」「ほか」は生起できると述べた。また、不特定の読みを持つ数量詞の構文において、「しか」は用いられるのに対し、「以外」「ほか」は用いられないと述べた。これらの表現の非対称性が生じる理由について、本稿は「しか」と「以外」「ほか」の否定辞との認可条件が異なるからであると指摘した。つまり、「しか」は否定辞から直接認可されなければならないのに対し、「以外」「ほか」は4.1節の(図2)のように、否定辞から直接認可されるのではなく、右側に(顕在的または非顕在的に)現れている「不定語モ」に認可されなければならないのである。また、このような「以外/ほか」と「不定語モ」は一つのまとまりとして機能していることを両者の語順制限から説明した。

今後の課題として、第一は、本文でも述べたようにどのようなメカニズムで「以外」「ほか」の右側に現れる「不定語モ」が顕在的にまたは非顕在的になるのかが残されている。第二は、本稿では、「しか」と「以外」「ほか」を分け、「以外」「ほか」をほとんど同様の表現として扱ったが、注1で述べたように両者はまったく同様の表現とは言いがたい。今後両者の性質についてもさらに研究を進めていきたい。

## 注

- 1 厳密には「以外」は次のように一定の条件の下で肯定文にも出てくる。

(i) 太郎以外、ほとんどの学生がハチマキをしていた。(江口(2000:309))

江口(2000:309,注17)は、「以外」が前述の(i)のように「範囲が設定されるような表現がホスト(ホストについては後の注5を参照)であれば、肯定文でも使えるようになり、その場合、「除外」解釈が得られる」ことを指摘している。つまり、そのホストが全体量化表現(universal quantifier)のようなものであると肯定文でも生起できるということである(茂木(2005:21-22))。しかし、本稿では否定辞と共に起する用法の「以外」のみを扱うので、上記のような肯定文と共に起する用法の「以外」は排除することにする。

- 2 山口(1991:36)は「其他否定」を以下のように定義している。

その他を否定することによる反転的な限定の表現を、略して「其他否定」の表現と呼び、かつ、そのうちの「其他」も一般語と区別する意味でこの漢字表記をすることにする。

また、宮地(2007:45)は「其他否定」の表現として「より」「きり」も提示している。

- 3 ただし、江口(2000)、茂木(2005)は上記の注1及び後の注10でみるように、これらの表現をまったく同列に扱っているわけではないが、その相違点に関する詳細な議論は行っていない。

- 4 片岡(2006)には「ほか」に関する言及はなされていないが、本稿が適宜修正したのである。

- 5 江口(2000:292)は下記の例で「しか」句を表す「(意味上)それ以外」の「それ」に対応する部分を明示する名詞句をホストと指す。

(i) 太郎しか学生はいなかった。

また、茂木(2005:17-18)は上の江口の説明に加え、ホストが除外対象となりうる「均質な属性を持った場合」を定義するもの(典型的には「類」を表す名詞句)でなければならないと指摘している。

- 6 この例文は適格文に思われるかもしれないが、江口(2000:293)はこの時の「ほか」は除外解釈ではなく、累加解釈の「ほか」であるとす。すなわち、江口は「ほか」には2用法があるとし、この文は「次郎と三郎の両方と呼ばなかった」という解釈はできるが、「次郎は呼んだが三郎は呼ばなかった」という除外解釈はできないと述べている。よって、この例文は不適格文である。

- 7 江口(2000)は「しか」「以外」に関しては具体的な例文を挙げていないが、(9)は本稿において適

宜修正し、入れたものである。

- 8 本稿における日本語のデータは Digital News Archives for Library (朝日新聞) から取った実例と作例を含む。これらのデータはすべて言語学を専門とする 50 人の日本語母語話者によりインフォーマント調査を終えている。本文中に引用する際は、朝日新聞からの例は「(朝日新聞年/月/日)」で示し、出典が表示されていない例文はすべて作例による。(10)–(12)における、「しか」と「ほか」の例文は「朝日新聞」から取った「以外」の例文を適宜修正したものである。
- 9 これに対し、朴 (2007a) では「しか」が付加部位置に現れる時は、単一否定文内で他の NPI と共起できることを指摘し、項位置の「しか」と付加部位置の「しか」は統語的性質が異なっていることを主張した。しかし、本稿では項位置に現れる「しか」のみを対象とする。
- 10 ただし、江口 (2000) においても、「ほか」は「しか」と異なって、単一否定文内で「不定語モ」と同じ項位置で共起できることと不特定の読みの場合生起できないことが指摘されているが、これに関する詳細な議論はなされていない。
- 11 これより詳しい内容は Park (2007) を参照されたい。
- 12 Nishioka (2000) は「しか」を「以外+不定語モ」のようにパラフレーズできると仮定し、「しか」においても多重否定極性項目構文が許されると述べている。しかし、これまでの多くの先行研究 (3 節参照) と本稿のインフォーマント調査から「しか」の多重否定極性項目構文、(23a)–(26a) は適格性が落ちていることが分かっている。
- 13 以下の英語の例文の和訳は筆者が適宜行ったものである。
- 14 Linebarger (1987: 362) は反語表現に用いられる動詞として (32) の「surprised」の他に「regret, doubt, odd, disappointed」などがあると述べている。
- 15 「直接の作用域 (immediate scope)」の定義について Linebarger (1981) (1987: 338) は以下のように定義している。

A negative polarity item is acceptable in a sentence S if in the LF of S the subformula representing the NPI is the immediate scope of the negation operator.

An element is in the immediate scope of NOT only if (1) it occurs in a proposition that is the entire scope of NOT, and (2) within this proposition there are no logical elements intervening between it and NOT.

## 【参考文献】

- 江口 正 (2000) 「「ほか」の 2 用法について」『紀要 (言語・文学)』32, pp.291-310, 愛知県立大学外国語学部。
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造：かき混ぜ文と否定呼応表現』くろしお出版。
- 角道正佳 (1984) 「「ほかの」「ほかに」「以外の」「以外に」」『日本語・日本文化』12, pp.1-25, 大阪外国語大学留学生別科。
- 沼田善子 (2000) 「(第 3 章) とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子 (共著) 『日本語の文法・時・否定と取り立て』pp.151-216, 岩波書店。
- 朴 江訓 (2007a) 「「しか…ない」の「多重 NPI」現象について」『日本語文法』7-2, pp.154-170, くろしお出版。
- 朴 江訓 (2007b) 「現代日本語における多重否定極性項目構文について」『日本言語学会第 135 回大会予稿集』pp.82-87, 日本言語学会
- 宮地朝子 (2003) 『日本語のとりたて：現代語と歴史的变化・地理的変異』沼田善子、野田尚史編、くろしお出版。
- 宮地朝子 (2007) 『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究：文法史構築の一試論』、ひつじ書房。

- 茂木俊伸 (2002) 「「以外」と「以外に」」授業の応用言語学特講 (於筑波大学, 2002年6月7日) におけるハンドアウト.
- 茂木俊伸 (2004) 『とりたて詞の解釈と構造』筑波大学大学院人文社会科学研究科 筑波大学博士 (言語学) 論文.
- 茂木俊伸 (2005) 「以外 (に) の用法と意味」『日本語複合助詞の研究』平成 16 年度筑波大学人文社会科学研究科プロジェクト研究「日本語複合助詞の体系化に向けた記述的研究」研究成果報告書, pp.15-35.
- 山口堯二 (1991) 「副助詞『しか』の源流—その他を否定する表現法の広がり—」『語源探求 3』日本語語源探求委員会編, 明治書院.
- 渡辺 明 (2005) 『ミニマリストプログラム序説』大修館書店.
- Aoyagi, Hiroshi and Toru, Ishii (1994) On NPI Licensing in Japanese. Noriko Akatsuka (ed.). *Japanese/Korean Linguistics* 4. pp.295-311. CSLI Publications.
- Baker, Carl Leroy (1970) Double Negatives. *Linguistic Inquiry* 1. pp.169-186.
- von Stechow, Kai (1993) Exeptive Constructions. *Natural Language Semantics* 1. pp.123-148.
- Haegeman, Liliane and Raffaella Zanuttini (1991) Negative Heads and Neg Criterion. *The Linguistic Review* 8. pp.233-252.
- Haegeman, Liliane and Raffaella Zanuttini (1996) Negative Concord in West Flemish. Belletti Adriana and Rizzi Luigi (eds.) *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*. pp.117-179. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*. Sophia Linguistica Monograph 19. Tokyo: Sophia University.
- Linebarger, Marcia (1981) *The Grammar of Negative Polarity*. Doctoral dissertation, MIT. produced by the Indiana University Linguistics Club.
- Linebarger, Marcia (1987) Negative Polarity and Grammatical Representation. *Linguistics and Philosophy* 10. pp.325-387.
- Nishioka, Nobuaki (2000) Japanese Negative Polarity Items *wh-MO* and *XP-sika* Phrases: Another Overt Movement Analysis in Terms of Feature-Checking. K. Takami, A. Kamio and J. Whitman (eds.). *Syntactic and Functional Explorations: In Honor of Susumu Kuno*. pp.159-184. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Park, KangHun (2007) Constraints on Multiple Negative Polarity Item Constructions in Japanese and Korean. 『言語学論叢』26, pp.61-81, 筑波大学一般応用言語学研究室.
- Sells, Peter (2001) Negative Polarity Licensing and Interpretation. S. Kuno et al. (eds.). *Harvard Studies in Korean Linguistics* 9. pp.3-22. Dept. of Linguistics, Harvard University.
- Watanabe, Akira (2004) The Genesis of Negative Concord. *Linguistic Inquiry* 35. pp.559-612.

## 用例出典

『朝日新聞オンライン記事データベース「聞蔵 (きくぞう)」DNA for Libraries』

(パク カンフン 筑波大学大学院博士課程  
人文社会科学研究科 応用言語学)